

ろば利用は困難な家族であると推測される。

しかし母子家庭になった時の末子の平均年齢が5.4歳であり、0～2歳の場合が30%を占めていることから、ひとり親への支援、とくに心のケアが必要と考える。

実施方法

①対象

乳幼児とその親(母子・父子を含む)

②広報・呼びかけ

児童館やひろばに出向けない親子への呼びかけには相当の工夫が必要である。母子会やひとり親の団体への働きかけ、行政の担当窓口、主任児童委員等へも呼びかけて理解を得ておくことが望ましい。

③開催

通常でも週末の開所が望ましいが、月に1～2回でも休日の開催が望ましい。

④受け入れ

受け入れは、静かにゆとりを持ったかわりを心がけ、とくに子どもの不安を取り除き、親子の一体感のあるかわりを大切にするために、無理な親子分離を行わない。

⑤活動の進め方

- はじめはくつろいだ雰囲気、自由にゆっくりと過ごせることを目的とする。スタッフやボランティアがそれとなく声をかけ、子どもの遊び相手をする。
- 家や子どもの年齢が近い、仕事や趣味が似ているなど同じような親子をつなぐ、紹介するなどを試みる。
- 求められれば相談をうけて、必要に応じて情報を提供したり他の機関やリソースにつなぐ。しかし押しつけにならないよう、判断は任せることが必要である。
- 子どもへのアプローチでは、たとえば時には男性のスタッフがかかわって、身体を使った活発な遊びも喜ぶよう

あれば行う。

- 親同士が親しくなって次回を約束できるようにになれば、希望のテーマを決めて話し合いを持つこともよいだろう。進め方は「親のエンパワーメントプログラム」や「情報提供」に示した親同士のグループの進め方が参考になる。
- 親同士、子ども同士が仲良くなって、ひろばに集うことが楽しくなるように楽しい親子遊びやわらべ歌などを提供するもよいが、あくまで参加は自由とする。

フォローアップ

- ① 参加人数が一定しなくても自由参加して、つどいを定例開催としておくことで、来られるときに来ても参加しやすくなる企画や配慮をして誘っていく。
- ② 通常からひろばに来やすいよう、時々はがきを出したり電話を入れてつながりを形成する。

留意点

- ① ひとり親家庭は、就労や日々の生活だけで親子で出かける時間のゆとりや、場所の確保も困難である。親子ともにゆっくりと過ごす時間も限られやすい。ひろば利用も休日に限定されるので、休日開所に努力する。
- ② 親子で外出して、家以外でほっとできる場となるような配慮が必要である。ひろばへの入りにくさは、はじめは誰にも共通しているが、初めての人にはとくに迎え入れを丁寧に行い、ひろばの内容についてオリエンテーションを行う。その後も時々声をかけて、ニーズに応じる姿勢を示すことが望ましい。
- ③ シングルペアレントになった動機はさまざまである。ひろばが、シングルであるか否かにかかわりなく、遠慮なく安心していられる場としたい。

ときには思いを聴いて気持ちを共有できるスタッフが求められることもある。そうしたニーズに応えうるスタッフの力量も欲しいところである。

- ④ シングルペアレントとして、同じ思いの親同士が語り合える場や機会が必要になることもあるだろう。「ひろばの相談」に示した専門家による「レインボウ・プログラム」が有効な場合もある。

14) 子育て支援者の研修

趣旨

現在たくさんのひろば等ができてきているが、「つどいの広場事業」においても、また NPO 等の現場においても、支援者の資格を規定したものはない。現場にいる多くのスタッフやボランティアが子育て経験を持つ先輩親であり、加えて子育てになんらかの力を提供したいとする善意の人たちによって運営されていることが多いのが現状である。

実践にあたっているスタッフやボランティアには善意の素人から、保育に経験も知識もある保育士や助産師、事務の専門家や地域活動を長くしていた人など、さまざまな人がいる。こうした人たちは職能集団として共通の言語を持っている場合とはまったく違い、「保育」「子ども」「見守り」といった言葉一つひとつにも理解が異なる。

ひろばは乳幼児の親子を対象とする特殊性から、保育や子どもについての経験・知識や専門性を持つ人がリーダーシップをとる可能性が多くなる。そうした中では専門性を持った人に「保育とは、支援とはこういうものだ」「こどもとは…」と他のスタッフやボランティアが指導されることが起こりやすくなる。その結果、その言葉を絶対的なものとして自らは考えなくなったり、指導に縛られて自らが生きいきと動けなくなるなども起こりやすい。スタッフ間の共通理解が必要である。

ここではスタッフ同士で日常的にも行える4つの研修プログラムを提案する。研修プログラムとしては、IVで別途研修について考察しているが、ここでは昨年度のプログラムの延長として提案する。

(1) スタッフ全体ディスカッションプログラム (みんなで話そう会)

目的

日ごろスタッフとして疑問に思うこと、

迷うこと、分からないことなどから、ひとつのテーマについてみんなで話すということを研修の機会とする。「正解がない」という前提で、一人ひとりの話に耳を傾け、以下を体験することを目的とする。効果としては、以下のことが考えられる。

- ・お互いを深く知るという貴重な親睦の機会となる。
- ・多様なものの考え方にふれる。
- ・共感しあうことができる。
- ・自らが語ることにより、主体的に創造的に活動に取り組んでいくようになる。

実施方法

ここでは、スタッフ、サポーター、学生ボランティアも含めた、親子にかかわるすべての支援者約 20 名程度を対象に 2 時間くらいで行うケースとして考える。展開例としては、以下のような進め方などがある。

- ①全体に向けてファシリテーターよりテーマの投げかけ。(5分)
- ②近くにいる4人から6人くらいが一つのグループを組み、テーマについて話し合う。(15分)
- ③各グループの発表(10分)
- ④発表を受けて、ファシリテーターが3つくらいの小テーマを立てる。(5分)
- ⑤自分が話したい関心のある小テーマに分かれ、話し合う。(45分)
- ⑥各グループ発表(20分)
- ⑦発表を受け、ファシリテーターがまとめを行う。(5分)

テーマ例としては、大テーマとして「最近ひろばで問題になっていること」として掲げたとすれば、そこから「気になる親子」「ひろばの環境」「安全」などの小テーマが浮かび上がってくる。このようなテーマを通して、話し合いを行う。

留意点

- ① 育児という正解がないものに取り組んでいる親子に接するスタッフにとって、

「こうすべき」という固定した情報を研修で学ぶよりも、このように話し合うかたちで、共通理解を作っていくことが大切である。中には「ただ話しただけ?」「何を研修で得たのかわからない」という感想を持つものも出てくる可能性もあるだろう。疑問な点や問題点は繰り返し話し合っ、スタッフ間で了解しあっうえで対応していくことが望ましい。

- ② この話し合いにおいては、スタッフ間、ボランティアとの間に上下関係を持ち込まないこと、親子にかかわるもの同士として対等な立場にあること、プライバシーにかかわる守秘義務、発言内容について互いに尊重する、外に漏らさない等についてのルールが守れることが大切なことになる。
- ③ ファシリテーターは何を言っても否定されない雰囲気をつくっていくことが重要である。日常的な事例を話すことによって、理解が深まったり、意味を感じたりできるような工夫が求められる。
- ④ これは年に数回を想定したスタッフ全体のプログラムであるが、このような話し合いが日常的なふりかえりのミーティングなどと連動することが望ましい。

(2) 傾聴トレーニング

(話を聴く・聴いてもらう)

目的

ひろば等において人を支援するには、なにかをやってあげたり、指導してしまうのではなく、カウンセリング・マインドをもつことやファシリテーター的な役

割を取っ、親子に寄り添うことが求められる。ひろばでの親は、お互いの話の中から答えを見つけることが多いし、ただ話したい、聴いてもらいたいという気持ち満たされれば、また聴いてもらうだけで気づいたり、問題が解決してしまうことが多いのである。

したがって、スタッフやボランティアは相手を指導するのではなく、まずは相手の話を聴く力をつける必要がある。話をしっかり聴いて、本人が答えを見つける手伝いをするのがスタッフの役割であることを再認識したい。

このプログラムでは、まず話を聞いてもらえない事態を体験し、次に聞いてもらえる体験をして、聴くということがどういうことかを考える機会とする。

実施方法

- ① 話を聴かない、聴いてもらえない体験
 - 互いに話を聴きあうが、相手の話をなるべく聞かないように努める。指導的・支配的であったり、自分の興味で質問を浴びせたりして悪い聞き方を試みる。
 - i 二人で組み、片方が話し役、他方が聴き役となり、聴いてもらいたいことを2~3分話す。感じたことをメモする。
 - ii 次に役割を交代し、同じく話し、聴く。気づいたことをメモする。
 - iii 互いに感じ、気づいたことを話し合う。この際、自分がどのように感じたかに焦点をあてて、正直に話し合う。
 - iv 人数が多い場合は、二人で話し合ったことを全体に出してさらに話し合うことで、みんなの共通理解とする。

② 相手の話をしっかり聴く

- i 二人で組み、片方が話し役、他方が聴き役となり、聴いてもらいたいことを2~3分話す。感じたことをメモする。
- ii 次に役割を交代し、同じく話し、聴く。気づいたことをメモする。
- iii 互いに感じ、気づいたことを話し合う。このようにしてもらってよかった点、もっとこうして欲しかった点などにつ

- いて、正直に話し合う。
- iv 人数が多い場合は、二人で話し合ったことを全体に出してさらに話し合うことで、みんなの共通理解とする。

(3) 「親」と支援者のロールプレイ

目的

支援者としてひろばにかかわっていると、相談をもちかけられることが多いが親の本音は見えにくい。回を重ねて信頼関係ができてこない、本当の気持ちを打ち明けてもらえないことが多い。親がどんな気持ちになるのか、ロールプレイで演じてみると分かることが多い。役を交代することで両方の立場や気持ちを体験して、支援の場で親への対応に備えることを目的とする。

実施方法

- ① 人数が奇数の場合は、一人がオブザーバー役を執り、気にならない位置にいて二人の話をひたすら聞く。気づいたことをメモして、二人の話には反応を表明しないことが大切である。
- ② 二人で組み、片方が親の役になって、その親が抱える問題について、10分ほど相手に相談する。答えを出す必要はないこととする。終わったら感じたこと、気づいたことをメモする。
- ③ 役を交代して同じことを行う。終わったら気づいたことをメモする。
- ④ オブザーバーも交えて、気づいたことを話し合う。人数が多い場合はその気づきを全体で話し合っ、共通理解を深めるようにする。

留意点

- ① 話されたことについて、解決策を考えるのではなく、話してみても得た感

触や感じたことに焦点をあてて話し合う。

- ② 親はこのように言われたらこのように感じるのだ、ということを経験する機会である。親が何を求めて、聞いてくれるスタッフに話しているのか、それに対してスタッフはどう対応したらよいかについて、考えあう機会とする。

(4) ロールプレイ「親グループの話し合い」

目的

ひろばでは親同士が出会い、それとないおしゃべりの中からお互いに学ぶことも多い。公園グループなどでは、一部の親のリードが強く、他の人が引きずられて言いたいことが言えない、どこに洩れるか分からないので、うっかりしたことが言えないなど、親しい間柄でも本音や深い話が話せないのが現状である。

ひろばにおいては、スタッフがいることで聴いてもらえるという安心感があり、親同士がグループで正直に話し合える設定もしやすい。研修としては、グループ懇談を想定して、スタッフがグループのファシリテーターを務めるために、スタッフ同士が親役を演じ、交代でファシリテーター役を練習する機会とする。

実施方法

- ① 5～7人でグループになり、それぞれが、自分で想定する親役を演じるが、交代してファシリテーター役をとる機会も入れていく。
- ② まずファシリテーター役が参加する「親」たちに、取り上げて欲しいテーマをあげてもらおう。テーマが集まったところで、参加者に話しかけてひとつのテーマに絞るための希望を聞く。一

人ひとりの要求に耳を傾け、時間をかけて全員が納得いくテーマに絞るように配慮する。テーマを絞ることで、はじめからその話題に入りやすく、目的をもった話し合いになりやすい。

③話し合いを始める前に、気持ちをほぐすために少しからだを動かしたり、ゲームや自分の思いを入れた自己紹介などのアイスブレイカーを行う。ファシリテーターは随時交代してなるべく多くの人が経験するようにする。

④話し合いに入る前に、ファシリテーター役が、この場を安全な場にするのを約束する。そのほか各自が安全であるために、希望すること、避けて欲しいことを出しあって、皆で確認する。

⑤決まったテーマについての話し合いを行う。話したい人から自由に話してもらう。順番に話しをさせるとか、話しに参加することを強制しないようにする。話しを独り占めしたり、意図的に偏った方向にもっていき動きなどについては軌道修正を行う。基本的にはグループのみんなが安心して話し合いに参加できるよう、一人ひとりの様子に気を配る。話しに入りにくい人については、話しやすい状況やタイミングを見計らって話す機会を提供するよう配慮する。

⑥一区切りがついたところで、これまでのセッションのふりかえりをする。

⑦以下について、皆で考察を行う。

i ファシリテーショングループに参加した「親」として感じたこと

ii このファシリテーションを親グループに用いるにあたって必要なこと、配慮することはなにか

iii ファシリテーター役をやって、気づいたこと、反省点、グループを行う上でのメリット・デメリットなど

iv ファシリテーション・グループに参加して、スタッフとして考えたことなど

⑧スタッフの次の集まりの際、ひろばで親との会話や、グループとの接触で気づいたこと、応用できたことについて話し合っスキルアップにつなげる。

留意点

① 個人のプライバシーにふれることが多いので、出てきた話について、守秘義務を守る。

② 職場としての上下関係があったとしても、研修の場には互いに対等な立場で参加し、発言しあうことが大切である。はじめにこれを確認しておくことで、強いものにひきずられたり、自分に不都合が生じるような発言ができなくなるなどの事態を避けることができる。これらが守られて、はじめて本音で話しができるのである。

③ ひろば等のリーダーや責任者は、こうした研修をスタッフに保障するとともに、研修をファシリテートできる外部からの講師を導入して、研修をより充実させる配慮をしていくことが望ましい。

3. 子育て家庭支援プログラムを豊かにするために

1) 子育て家庭支援プログラムの基本的な考え

1 ひろばが基盤であること

プログラムの提言の冒頭でも述べているように、これらのプログラムは基本的には子育てひろばを基盤として考えている。ここでの「ひろば」(ドロップイン)とは、親子がいつでも気軽にふらっと訪れることのできる安心感が持てる場所である。それは、親子にとっての本当の「居場所」となる場である。そのためには、週に3日以上は開かれている常設の場であることが必要となる。また、そこは単なる「屋根付き公園」であってはならない。そのためには、そこにはスタッフがいて、親子が本当に安心して過ごせる場とするために、家庭的な温かい雰囲気を作り出し、親にとっても子どもにとっても豊かな環境が構成され、そこで出会った親子が自然と無理なくつながる場となるような工夫がなされる必要がある。そのような、単なる場の提供だけではなく、親子が生き生きと過ごす場としての質的な充実が求められる場である。

もちろん、ひろばを基盤としない場での活用も可能である。しかし、ここに提案したプログラムの多くは、ひろばを基盤とすることで、実に有効に機能すると考えられる。例えば、学生や中高年世代、あるいは障害を持った方、マタニティの方々との交流の場として考えた場合、そこには基本として日常的に集う親子がいることで多様なかわりを生み出す場となることが可能になる。プログラムだけを切り取って考えると、それは非日常的な「イベント」性の強いものになってしまうだろう。つまり、「居場所」機能と「ネットワーク」機能はうまく組み合わせる

ことでより豊かに展開することが理解できるのである。

情報に関しても同様である。単にインターネット上、あるいは掲示板の情報だけではなく、そこに集う親子との交わりの中で情報交換がなされるならば、それはさらに血の通った豊かな情報となるであろう。

相談機能についても同じである。多くの親たちの相談したい内容は、非常に日常的な内容であることが多い。それはあえて専門家に1対1で相談するまでもないことが多く、ひろばの中で親同士の気軽な話や、先輩ママとの話、他の子どもの姿見たり聞いたりすることで簡単に解決してしまうことが多い。それで解決しない場合でも、ひろばで気軽に話のできるスタッフや専門家がいれば、もう一歩立ち入った相談も可能である。ここに親子が日常的に気軽に集えるひろば機能の意義がある。

こうして考えると、ひろば機能を基盤としてプログラムを捉えていくことの意味は非常に大きいのである。

2 プログラムという考え方

つまり、ここでのプログラムは、ひろば機能という日常的な営みとの関連性の中で捉えていくことを基本に捉えていることを十分に念頭に置く必要がある。

プログラムの捉え方として、学校現場での連携に関する秋田喜代美の4つの視点が非常に参考になる。それは、「互恵性」「顔の見える関係性」「継続性」「物語り性」という視点である。

「互恵性」とは、連携する互いにとって何らかの恵みがあるということである。特に、学生、中高生、障がいをもった方など様々な交流を中心としたプログラムがここでも提供されているが、それらは親子、あるいは交流の対象のどちらかにとってメリットがあるのではなく、どち

らにとってもメリットがあるようなものにならなければならないことが示されている。

「顔の見える関係性」とは、互いが固有名詞で呼び合えるような関係であることである。プログラムを通して、そこで出会った人同士が互いを固有名詞で呼び合い、本当の意味でその人と出会えるような関係を作ることを目指すことの重要性が指摘されている。

「継続性」とは、そのプログラムが1回限りではなく、継続的につながっていくようなものとするのである。提案したほとんどのプログラムがそうであるが、継続性を重視している。プログラムの企画を通して何らかのつながりや喜びなどのきっかけから、次につながっていくことが望ましい。

「物語り性」とは、プログラムを通して、何らかの豊かな出来事が生まれることである。イベントとしてこなすだけのプログラムからは「出来事」(エピソード)は生まれにくい。プログラムをふりかえり、豊かな語りが生まれるような内容が求められる。

これら4つの視点を踏まえ、プログラムが単なるイベント化しない工夫が必要である。

3 「子育て支援」とは何かという問いがあること

プログラムを展開するにあたって、そもそもこのプログラムを通して何を大切にしたいのかという意図をある程度はしっかり持っている必要がある。「子育て支援」の大きな問題性の中に、あるプログラムを行うことを通して、それがどのような子育て支援になっているのかという問いがなされていないことがよく指摘される。例えば、保育の場などで親子の楽しい遊びを提供するイベントが企画され、楽しかったという声がよく聞かれる。た

しかに、このようなイベントを提供することには、親子が楽しいひと時を過ごす場が提供されることや、遊びを知らない現代の親子が遊びを知るなどの意味があることは理解できる。しかし、その一方で、親子がいつもこのような受身の場で過ごすことが本当に親子の成長にとって望ましいのかという指摘もある。

つまり、私たちが子育て支援を行うにあたって、それが本当に支援になっているのかという本質的な問いがつねに必要なのである。子育て支援の目的としては、例えば次の5点のような視点が考えられる。

- ①親にとっての支援
- ②子どもにとっての支援
- ③親子関係、家族関係の支援
- ④支え合いのネットワーク作りとしての支援
- ⑤子育てしやすい環境づくり支援

これらの5つの視点はそれぞれ連動するものでもある。親にとっての支援は、子どもにとっての支援とも連動する。親子関係や家族関係の支援が親にとっての支援ともなる。また、ネットワークや子育て環境づくりの支援が親にとっての支援にもなる。このように、これらの5項目はそれぞれが関連しているものである。

しかし、親にとっての支援とは何かということそのものの自体が単純ではない。親にとっての支援ということ、「親が無理なく子育てできるように手を貸すこと」と考える場合もある。また、「親が親として育つための学びをすること」と考える場合もある。さらに、「一人の女性、一人の人間としての自立を支援すること」と捉えることもあるだろう。「親にとって」と言っても、人によってもその力点は異なる。これは、「子どもにとっての支援」という場合も同様である。つまり、それぞれの項目そのものについて、子育て支援を行う上では問いをもって向き合うことが必要となることを意味する。

特に、プログラムというもののもつ性格上、何かこのプログラムを実施する(こ

なす) ことで、よい効果が得られるという誤解を生みやすい。むしろ、大切なことは、このプログラムをどのように運用すれば、子育て支援として意味あるものとして機能するのかという問いが必要なのである。プログラムを実施する上で以上の5点を念頭に置いた子育て支援としての効果を十分に考慮して展開されることが求められる。

2) ひろばのプログラム ーその活動のあり方ー

1. 問題提起

地域の中で親子が自由に集い、相互の交流を通じた子育て支援が期待される「ひろば」については、近年急速に社会的関心が高まり、活動に取り組む団体・施設が急増している。福祉制度上の事業としては、つどいの広場や地域子育て支援センターなどが一定の補助を得て活動を展開している他、公的補助を得ずに民間レベルで草の根的にひろばを開設する例も見受けられる。

ひろばに取り組む実践団体が急増し、またその活動も多様化しつつある中で、サービスの質をどう高めていくかが重要な課題となっている。単に、親子が集まる「場所（スペース）」としてではなく、どのような支援を展開していくのか、つまり「資源（リソース）」として活動の内容が問われ始めているのである。

例えば、平成 16 年度末には全国でつどいの広場が 171 箇所、地域子育て支援センターが 2,783 箇所となる見込みであるが、各所のひろばにおいて提供されるサービスの質にはかなりの格差が生じていると言える。スタッフが利用者（親子）に対して十分なかかわりを持ち、利用者のニーズに基づくプログラムを提供しようと努める実践団体もあれば、単に場所を開放しているだけでスタッフのかかわりすら確保されていない団体も散見される。また、積極的にサービスの質の向上に努める実践者であっても、子育て家庭をめぐる地域の実情及び課題を見据えつつ、どのような支援が求められるのかを試行錯誤し、懸命に模索している現状があると言えよう。

今後、地方公共団体が策定する次世代育成支援行動計画の目標値の総計に基づけば、平成 21 年度末にはつどいの広場が 1,555 箇所、地域子育て支援センターが 4,402 箇所となり、現状のほぼ 2 倍に

増加する見通しである。地域の子育て支援の拠点としてひろばに対する社会的期待が高まる一方で、すでに現時点においてサービスの質に格差が生じている中、その活動について詳細な検討を加えていくことが急務となっている。

本稿では、ひろばのプログラムに焦点を当てて、実践者の創意・工夫に基づく多様性を尊重しつつも、その活動の基本的なあり方について考察を行う。

2. 「ノン・プログラム」という考え方

最近、ひろばの活動のあり方をめぐって実践者たちの間でしばしば議論となるテーマの一つに、「ノン・プログラム」という考え方がある。「ノン・プログラム」とは、とくにプログラムを設定しないで、自由に過ごしてもらおうことと言える。

「ノン・プログラム」という表現は、ともすれば「プログラムそれ自体が必要ない」とか、「支援者は何もしなくて良い」と曲解される場合もあろう。しかし、先駆的な実践者たちが提唱する「ノン・プログラム」という考え方は、むしろひろばが果たすべき機能やその活動のあり方に関する課題提起を含んでいると考える。また、そうした課題が提起される背景には、これまで保育実践や母子保健などを中心に展開されてきた従来型のプログラムに対する疑問が投げかけられているように思える。

第一に、従来型のプログラムにおいては、乳幼児、母親、あるいは親子が同一の空間に集まり、一斉に同じ活動に参加する「集団参加型」が主流であったと言える。例えば幼児を対象とした手遊び、歌、リトミックなどにしても、また主に乳幼児の母親を対象とした育児教室にしても、集団を対象に設定された同一のプログラムに利用者が参加する形式が中心であった。しかし、利用者（親子）が任意に自由な時間を過ごすひろばにおいて

は、むしろ利用者を迎え入れ、つなぎ、居心地の良い場を創造すること、すなわち特別なプログラムが用意されていなくても個々人が安心して過ごせる支援のあり方により重点が置かれるべきである。つまり、集団参加型のプログラム活動から、より「個」を重視した日常的な（普段の）かかわりに活動の中心軸を移行すべく、「ノン・プログラム」が提唱されるようになったと考える。

第二に、乳幼児とその親を集めて一方的に遊びや知識を与える従来型のプログラムは、利用者をサービスの「受け手」ととどめてしまうのではないかという疑問である。専門家による指導が繰り返される場合、利用者自身が自ら考え試行錯誤する過程を軽視し、専門家への依存を過度に高めてしまう可能性もある。むしろ、利用者同士やその他の人たちとの日常的なかかわりを通して、相互に支えあい、かつ経験的に学習するプロセスが重視されるようになってきている。つまり「ノン・プログラム」という考え方は、専門家による「提供型」支援から、より利用者の主体性を重視し、利用者同士の相互支援を中心とするプログラムへの転換を志向するものであると言えよう。そのような観点から、利用者のコンピテンスを高め、成長する力を引き出していくような「エンパワメント」がより重視されるのだが、この点については後述する。

以上に述べてきたように、「ノン・プログラム」とは、従来の「集団参加型」「提供型」プログラムに対する課題提起であり、新しいプログラム活動のあり方を模索する動きとして捉えられるべきであろう。換言するならば、これまでに保育や母子保健等を通して確立されてきた各種のプログラムを、形式的に活動の中に取り入れるだけでは不十分であることを示唆する考え方であると言える。

3. 当事者性と専門性

不特定多数の利用者が任意に利用するひろばという場の中で、居心地の良い空間と時間をつくりだしていくためにはどうすればよいか。さらには利用者同士の相互支援機能を高めていくためにどのようなかかわりが求められるのか。これらの問いは、ひろばに対する社会的期待が高まり、実践活動が急速に活発化する中で、その活動の本質にかかわる重要な課題として位置づけられるべきであろう。

これらの課題提起に呼応するように、近年、ひろば活動における当事者性が重視されるようになってきた。つまり、支援者と利用者との水平・対等な関係を基本とし、徹底して利用者（当事者）の視点に立つことによって、課題解決が導き出されるという考え方である。その背景には、子育て中の親や子育て経験者を中心に草の根的なひろば活動が拡がり、その一部がつどいの広場として事業化されてきた経緯がある。つまり、当事者運動あるいは市民活動としてひろばの実践活動が展開されるようになるにつれ、次第に当事者性が脚光を浴び、強調されるようになったと言える。

当事者性に象徴されるように、利用者主体の視点に立って効果的な支援やプログラム活動のあり方を検討することはきわめて重要である。しかし、それは当事者でなければできないわけではなく、また当事者であれば必然的にできるというわけでもない。専門性にプライオリティを置くあまり指導的援助に傾斜しがちだった専門家の姿勢を見つめ直す必要性はあるが、かといって誇張された当事者性の重視は、当事者として活動に従事する実践者の「過信」を招きかねないリスクもあろう。

当事者性の高まりは、一方で保育実践や母子保健等で培われてきた専門性の軽視に結びつく可能性もある。しかし、双方は本来対立するものでも相容れないものでもなく、むしろ効果的な支援方法を

検討する上では両方ともが不可欠なのである。当事者の視点に立ってニーズや課題を把握すると共に、対人援助にかかわる基本的な知識や技術をふまえ、ひろばにおいて必要とされるかかわりや支援のあり方を追究する支援者の姿勢が肝要であると言えよう。

4. 家族支援からみたひろばの働き

日本においては近年急速に実践展開が拡大しつつあるひろばであるが、アメリカやカナダを中心とする北米ではこれに相当する活動としてドロップイン (drop-in) があり、1980年代以降、家族支援プログラムの一環として活発に実践及び研究がなされてきた経緯がある。

ウィッスボードとケイガンによれば、家族支援プログラムにおける目標は、①子どもの養育の役割における親の能力の向上、②親が自分たちの利益のために活動できる力を高め、変化を起こす代弁者になれるような機会を創造すること、③親に対して地域資源を提供すること、に焦点を置いている。これらの目標を達成するために、家族支援プログラムは以下のような活動形態を含んでいる¹⁾。

- a) 親に対する教育と支援のためのグループ
- b) 子どもの発達に焦点を置き、健全な家族関係を促進するような親子の共同活動
- c) 他の家族や専門職員と共に、任意に自由な時間を過ごせるようなドロップイン・センター
- d) 親が他の活動に従事している間の子どものケア
- e) 地域における子どものケア、保健、栄養管理、カウンセリングに関する情報提供や他機関へのサービス送致
- f) 一般的に、接近困難な家族を家族支援プログラムに導入されるために行われる家庭訪問

g) 親に対する保健、栄養講座、子どもに対する発達診断や健康診査

上記の見解に見られるように、ドロップインは家族支援プログラムの中に明確に位置づけられている。また、カナダの「ファミリー・リソース・センター」やアメリカの「ファミリー・サービス・エージェンシー」といった家族支援機関においては、ドロップインだけでなく、親教育プログラムや相談援助活動、あるいはレクリエーションなどを通じた親子の協同活動が並行して行われている場合が少なくない。さらにはレスパイトなどの一時預かりや、アウトリーチ・プログラムを含めて家族支援プログラムが複合的に提供されている実践例も紹介されている。

ここで取り上げたいことは、日本においては文字通り「ひろば＝ドロップイン」として捉えるのか、それともより広義に「ひろば＝家族支援の拠点」として捉えるのか、という問いである。後者の立場に立てば、家族支援を担う専門機関が確立されていない日本では、今後ひろばを拠点として積極的に家族支援プログラムを展開することが望ましいと考える。

すでに現状において、子育てに関する講座や情報提供、レクリエーション等による親子の共同活動に取り組むひろばは少なくない。また、先駆的な例ではあるが、親教育をひろばのプログラムに導入する試みも見られる。さらに、一時預かり型のサービスについては、子育て支援センターに一時保育が併設されている場合や、つどいの広場の中にも自主事業として一時預かりを実施する団体が見受けられる。このように、実際的なひろばのプログラムは、必ずしもドロップインのみに限定されたものでなく、複数の家族支援プログラムを並行して導入しつつ、地域の子育て支援の拠点機能を担う方向に向かっているように思えるのである。

その一方で、つどいの広場にせよ、地域子育て支援センターにせよ、現状の公的補助及びそれに基づく人的配置や設備

環境等の条件下では、プログラム活動の範囲に限界があるのも事実である。したがって、子育て支援の拠点として、地域の他の関係機関・団体との連携を図りつつ、ネットワークを形成することによって、地域全体で家族支援機能を担うことが重要であるとも考える。

日本の子育て支援をとりまく現状を概観すると、児童相談所や家庭児童相談室による相談援助をはじめ、保育所、児童館、乳幼児健康診査、育児教室、子育てサークルなどの各種育児支援や母子保健事業があり、家族支援プログラムを部分的に担う社会資源は存在する。しかし、家族支援プログラムを網羅した包括的な支援体制が整っているかといえれば疑問が残る。むしろ、バラバラにサービスが点在しており、家族支援という観点からそれらを総合的に捉え切れていないのが実情であろう。

家族支援の観点からひろばのプログラムを捉えなおすと、ドロップインを核としながらも、当該地域の子育て家庭のニーズに応じて多様な働きを担うことが期待される。親に対する相談支援や親教育、情報提供、親子の共同活動などは、すでに先例が報告されているように、ひろばのプログラムに効果的に取り入れることが可能であろう。また、必ずしもひろばが単体としてそれらの機能を担うだけでなく、むしろ地域の子育て支援ネットワークを形成することによって家族支援プログラムを包括的に展開することも期待される。そのような意味で、行政や他機関との連携の中で、地域ネットワークの中核的機能の一翼を担うこともひろばの重要な働きではないかと考える。

5. ピアサポートとエンパワメント

これまでひろばに期待される多様な働きについて言及してきたが、どのようなプログラム活動を展開するにしても、ひ

ろばの本来的・中心的機能がドロップインであることは言うまでもない。まずは、乳幼児やその親が安心して自由な時間を過ごすことができる居心地の良い場をつくりだしていくことが最も重要であり、すべてのプログラム活動はそのような基盤の上に構成されてこそ効力を発揮すると考える。そこで、以下、ドロップインとしてのひろばのあり方について、「ピアサポート」と「エンパワメント」の2つの概念に焦点を当てて、効果的な支援のあり方について論じていく。

1) ピアサポート

子育て中の親と子どもが集うひろばにおいては、利用者同士の自助や相互支援が期待できる。ピアサポートとは、端的に述べるならば同じ立場にある同胞・仲間（ピア）による支え合いである。実際、筆者が2004年に全国68箇所のつどいの広場の利用者（保護者）を対象に行った実態調査では、「ひろばを利用することで子育て中の仲間が増えた」と回答した人が75.6%、また「孤独や孤立感を感じるものが減った」という回答が75.2%あった²。子育て家庭の孤立化が進む中、人と人とを結びつけ、相互のかかわりやふれあいの中から生まれてくる効果に改めて目を向けていくことが重要なのである。

子育て中の親同士のピアサポートは、ひろばが果たすべき中核的な機能として位置づけられる。ひろばにおける何気ない日常的な会話を通して得られる親同士の相互支援は、専門家による支援では得がたい効果を期待できることも少なくない。例えば、子育てについて悩みを他の利用者に打ち明けたとき、他者も同じ悩みを経験していることを知るだけで不安が軽減される場合がある。つまり、「悩んでいるのは自分だけでない」ということを理解し、共感を得ることで、人は支えられる場合が往々にしてある。さらに、お互いに悩みを話し合う中で、他者の経験との比較を通して得られる気づきは、親としての自己覚知を促す効果もあると

考える。

親同士のピアサポートは、悩みや不安を軽減するだけでなく、喜びや楽しさを増加させる効果をも有している。子どもの成長への期待や喜びを仲間と共に分かち合う経験は、親としての肯定的な自己評価を高め、子育てに向き合っていく動機付けを高める効果がある。悩みや不安などのネガティブな感情だけでなく、喜びや楽しめといったポジティブな感情を共有することも大切な経験となるのである。

したがって、支援者の役割としては、まずは支援者自身が子育て中の親に寄り添って、不安や悩みも、喜びも、ともに分かち合う存在であることが求められる。また、親同士を結びつけ、相互に支えあえる望ましい関係を形成できるように、利用者集団に対して側面的にかかわるファシリテーターとしての役割もきわめて重要であると言える。

2) エンパワメント

エンパワメントとは、利用者の主体性を尊重し、病理的な面よりもむしろ長所や健康的な面を重視して、潜在的な強さ・能力を引き出していくようなアプローチである。

近年、少子化が加速度的に進行し、子育ての大変さが強調される中で、ともすれば親を“弱者”扱いする傾向が高まっている。親を“弱者”と見ることで、支援者の「してあげる」「やってあげる」という一方的な援助や指導的態度が強化され、利用者の依存傾向を過剰に高めている場合があるように思える。エンパワメントの視点に立てば、利用者の主体性を高め、親としての力を引き出していくようなかかわりが必要とされるのである。

ひろばにおいて親のエンパワメント促すためには、支援者と利用者との対等な関係の中で、「寄り添い、共感し、ともに考える」プロセスを通して、最終的に利用者自身の力で問題解決を図れるように支えていくことが重要である。ま

た、利用者がひろばの活動に主体的に関与することによって、自分のためだけでなく、他の親子のために能力を発揮できる機会をつくりだしていくことも重要であると考えられる。実際、前項で触れたつどいの広場の利用者に対する調査では、ひろばを利用するようになって「他の親子のために自分ができることを考えるようになった」という回答が59.6%あった³。

例えば、利用者がひろばの運営に参加したり、ときにはプログラムの企画・実施にメンバーとして加わる場合がある。また、普段の利用者同士のかかわりの中で、相手の相談に乗ったり、子どもの面倒を交代でみたりといった、何気ない支えあいの中にも他者のために自分の力を役立てる機会を見出すことはできる。他者の役に立つ経験によって、自分自身の肯定的な評価が高まり、存在意義を見出すことが、エンパワメントを促す誘因となるのである。さらに、子どもたちがお互いにかかわりあい、またひろばに集う様々な大人とかかわる機会を日常的な活動の中に設定していくことで、子どもの「成長する力」を引き出していくこともエンパワメントとして捉えることができる。

支援者の役割としては、個々の利用者の個性や潜在的な力を見極め、ひろばにおいてそれぞれに力を発揮できるような機会をつくりだしていくことであろう。単にサービスの受け手として利用者を「お客様」扱いすることなく、かといって無理強いすることなく、さりげなくそのような機会を設定することが肝要である。

6. まとめ

これまで述べてきたように、ひろばのプログラム活動の基本は、まずは親子を迎え入れ、つなぎ、居心地の良い場を創

造することにある。同時に、利用者同士の相互の交流を通して、ピアサポートやエンパワメントを促すようなファシリテーションも、ひろばの基本的なプログラム活動に位置づけられるべきである。

こうした「土台」の上に、相談援助、情報提供、親教育、レスパイト（一時預かり）といった家族支援プログラムが複合的に展開されれば、地域子育て支援の拠点として一層望ましい。あるいは、地域ネットワークの一翼を担い、他機関・施設との連携に基づいて地域全体で家族支援を展開することも可能であろう。

最後に、こうした活動を展開する上では、支援者には単に経験や当事者性だけでなく、相応の知識や技術が求められる。したがって、支援者自身が力量を高めていけるように研鑽に努めることと、そのための研修の機会を設定していくことが不可欠である。また、国や地方公共団体においては、ひろばの運営の安定化と基盤の確保のために、財政的な支援の拡充を強く望むところである。

（本稿は渡辺顕一郎氏の特別寄稿による）

-
- ¹ Weissbourd, B., & Kagan, S. L. (1989). Family support programs :Catalysts for change. American Journal of Orthopsychiatry, 59, 20-31.
 - ² 渡辺顕一郎(2004). 『つどいの広場の効果と課題－利用者に対する調査結果から－』、第3回全国つどいの広場事業実践交流セミナーin ぜんつうじ報告資料.
 - ³ 同上

3)子育て支援者の役割について

(1) 人が作り出すひろばの雰囲気

今回プログラム提案と実践研究の中で多くの現場での実践を知ることが出来たが、その中で子育て支援者として基本的に大切な要素とは何なのか、改めて考える機会となった。

私自身は東京都江東区にある“子ども家庭支援センター みずべ”で子ども家庭支援ワーカーとして働き、そのひろばには毎日50組から70組ほどの親子がつどいあい、にぎやかに毎日を過ごしている。“みずべ”に来るお母さんお父さんたちに話を聞くと、「何だかわからないけれど、安心する」「もうひとつの家のような」「リラックスできる」といったことをよく聞く。また見学に来る方にも感想を聞くと、そこでもやはり「明るい」「清潔」といった褒め言葉と共に「ここにくるとホッとする」「とてもあたたかい雰囲気です」「もっと長くいたくなる」「居心地のよいひろばだと思います」といった感想が聞かれる。もちろん物理的な環境も大切な要素だが、それを創り出していくのも人間であり、みなを感じる「あたたかさ」や「ホッとする」というものは何なのか、今回、様々なプログラム実践の中で感じられることはその支援者たちのもつ雰囲気や、親子へのまなざしは何より大きく作用していると思え、ここではみずべでの活動を主にしながら、居心地のよいひろばをつくっていく支援者の役割や働きについて考えていきたい。

(2) “みずべ”が求める専門性とは

—やさしいまなざしと冷静な判断そして総合性—

数年前「子どもと家庭にやさしい援助者に！」をモットーにスタッフで話し合い「みずべスタッフの心得12か条」※1を作成、そして実際にひろばを運営し、改めて整理をしていくなかで、専門性を

構成する基本的な要素に「やさしいあたたかなまなざし」と「冷静な判断」という大切な2つの視点がみえてきた。

①やさしいまなざし

i 一人一人へのまなざし 人権意識をもつ

生まれてくる子どもたち一人一人が誕生を待ち望まれ、祝福されながら迎えられ、多くの人との関わり、暖かなまなざしの中で育っていく。それが皆の願いであり、命の尊さ、重みを社会全体で受けとめられるよう推し進めなくてはならない。

子どもも親たちも地域の市民も、義務ではなく豊かな体験をする権利、勉強する権利、社会を創っていく権利があり、子育ての支援者はその権利を様々な要因で行使できない人々の援助者となり代弁者となっていくことが必要である。

守秘義務といった問題も単に秘密保持ということだけでなく、その人の人格を守り、大切にしていける気持ちを忘れずに考えていく必要がある。

ii 肯定的な見方

“みずべ”の主任だったHは不思議な雰囲気を持った人で、親や子どもたちはもちろんのこと、実習にきた学生、アルバイトできたスタッフなどからHに会いたいと言って、いつまでも通ってくる人が多い。「Hさんと会うとホッとする」、「Hさんに会うと癒される」という声もよく聞く。なぜそのような雰囲気が出てくるのか。私はHと共に保育園で働いていたときがあり、同じクラスを持ったこともありましたが、思い返すと私が子どもの問題性を指摘すると、必ずHは「～ちゃんにもこういう所がある」とその子に対しての肯定的な意見を返してくるのであった。そこでは私はいつも表面的なことしか目が行かず、物事の本質を見落とししていると気付かされた。きっとそんなHの人間への肯定的なまなざしが相手を安心させるのではないのだろうか。

単に外見、表面だけ見てすぐに決め付けやレッテルを貼る人では安心した気持ちは生まれてこないはずである。

iii 子ども、親の側にたって考えられる
“みずべ”では「子育て塾」という名で少人数でのグループワークをやっているが、テーマとして多く取り組んできたことに「生活リズム」がある。そこではシートを作り自分自身の生活リズムを見直す作業もするのだが、起床時間や就寝時間は通常では考えられないような時間帯であったり、テレビやビデオの視聴時間がとても長かったり、驚くような結果が出ることもあった。しかしながら親たちの話を聞くと、多くの人は「うちはダメなんですよ」「遅寝遅起で」と自己に対して否定的であり、自覚的であることがわかる。そこでは改めてお説教をされるような「生活リズムの見直し」であれば次回から誰もこなくなってしまう。遅寝遅起ならそれはそれで、何らかの要因があるはずで、話し合いの中では、社会全体が夜型であることや、父親の帰りが遅いこと、テレビを見てもらわないと家のことが何もできないこと、など様々な本音が飛び交う。そうした生活の実情をしっかりと理解することが親の側に立って考える第一歩である。

しかし子どもの側にたってみると、生活習慣の基礎が出来上がった後でそれを変えていくことはとても難しく、実際の体験よりテレビやビデオ、ゲームなどの仮想体験が増えてしまっていることや、おなかがすいたり、眠たくなったりといった生理的な感覚が衰えたり、じっくりと遊びこむといった時間が保障されていないといった現実もある。そうした中どちらの身にも共感し受け入れながら、次の一歩を考えられるような援助が求められている。

iv 子ども、親に寄り添う心

現在よく「寄り添う」ということが言われる「寄り添う」とはどのようなことな

のか、一つの事例を通して考えてみたい。

”みずべ”スタッフTは保育の経験等も無い若いスタッフであるが、ある時兄弟で遊びにきている子のお兄ちゃんの方に気に入られ、その子は”みずべ”に遊びにくるとじっと事務室の中をみつめ、Tを探している。Tは時折その子に手をひかれプレイルームへ行き、一緒に遊ぶことがあった。しばらくそのような状況が続き、お兄ちゃんの要求は徐々にエスカレートしていき、とにかくいつも遊んでほしいと手を引っ張り、時には体当たりをしてきたりやたたいたりしてくることもあった。そして遊び始めればしつこいと思えるくらいベタベタするといった姿をみせていた。Tは受け付けの役割ももっていた為、そういつも事務室を離れるわけにはいかず、Tも悩むようになってきた。スタッフ間で話しあいを持つことになり、私は受け付けという役目もあるし、ある程度間を置くことも必要ではないかと考えていたので興味深く参加していると、Tからはいくつかの悩みが話された。「自分の役目がどういうことか判断が難しい。受け付けもきちんとやらなくてはいけないし、でもあそこまで要求されると受けていってあげたいし。あの姿がどこからくるのかもよくわからない。」そう話した後にもう一つ気になることがあるということでTが話したのは「お母さんが兄弟に接する姿をみてどうも上の子と下の子では接し方が違うような気がする」ということだった。そのことについては他のスタッフからも意見が出て「下の子への声かけがとても優しいが上の子に対してはどうもきつい口調になっている」「下の子をよく抱っこしている姿をみるけど…」といった姿が報告され、なかなかしつくりとっていない親子関係がみえてきた。そこでは、親も子どもどちらにも寄り添っていくことが必要ではないだろうかという話しになった。子どもにとってはまず受け入れられ、自分を認められることが必要で、親自身もまずはなかなかうまくいかない子育てを共感的に

受け入れられ、見守られる中から新たに子どもとの関係を構築できる力がわいてくるのではないかということである。

話しあいの結果としてはその子からの要求があった場合、スタッフ間の連携をとりなるべくTが受け入れられるようにしていくこと、また関係がついてくる中で、今は出来ないといったことや次への約束をするなどしながら、信頼関係を築いていくこと、また母親へは他のスタッフが少しずつ関係を取りながら話しを聴いて行くということになった。

寄り添うということは単に受け入れるということだけでなく、様々な面から考え、見通しをもち、スタッフ間の連携も重要であるといことがよくわかる事例であった。

v 人と人を結ぶ力

現代はコミュニケーション不全の時代言われ、悲しいけれどもそういう実感をもたざるおえない状況になってきた。そうした中子育てひろばは物理的な環境と共にコミュニケーションのひろばでもあり、はじめて一人でひろばを訪れた人は「自分はここに来てよいのだろうか」「どんな人たちがいるのだろうか」「グループとかができていて入りにくくないだろうか」といった漠然とした不安をもちながら来ることも多いはずである。そんなとき暖かく迎える言葉がどれだけ気持ちを楽しませ、心を柔らかくするか、いくつかの事例をもとに考えてみたい。

”みずべ”スタッフのAは短大を出てすぐに就職し、初めての職場が開設時の”みずべ”であった。保育の経験や子育ての経験などまったくない自分にいったい何ができるのだろうか大きな不安をかかえてのスタートだったAは、主に受け付けを担当。

そこで心がけたことは始めて着た人に丁寧に説明をすること、そして親の声、子どもの表情や姿を誠実にしっかりと受け止めるということであった。”みずべ”は毎月100組前後の親子が新しく

訪れるので、それを1組1組丁寧に対応していくの大変なことである。毎日毎日同じ説明を繰り返し、2度3度と訪れる人には、「こんにちは」「よくきてくださいました」そして多くの子どもに名前呼びかけていた。

何年かたって、ある新規の受け付けをしていた時、いつものようにAが丁寧に話しをきいていると、どうも母親の様子がおかしく、そのうち涙ぐみはじめ、Aの「だいじょうぶですか?」という優しい問いかけに、母親は「こんなに私の話しをきちんと聴いてくれたのは始めてのことです」と返事をした。もちろん少し前にいやな事があったのかもしれないし、気持ちが不安定になっていたのかもしれないが、真摯に話しを聴くAの姿勢が伝わったことは確かである。こちらから話しかけることだけがコミュニケーションではなく、心を開き、気持ちを開く、そしてそれはまず自分から聴く姿勢をもち、心を開いていくことが必要であるといえる。

ある時ひろばから「ケタケタ」と笑い声が聞こえるので、のぞいてみるといつものようにスタッフのOがお母さん2~3人と話しをしていた。Oは幼稚園教諭の経験もあり、開設時からのベテランスタッフである。どうもその時は始めてひろばにきたお母さんをよく通っている人たちに紹介していたようで、Oのまわりにはいつも明るい笑い声が満ち溢れている。OもAと同じく、多くの親子を名前呼びが、あるとき2回目にきた親子をみつけたOは「えーっと」と少し考えたあと「〜くんいらっしやい」と声をかけた。すこし緊張気味のお母さんの顔がゆるみ、「名前を覚えていただいてありがとうございます」と言った。AもOも子どもの名前をよく覚えるが、改めて考えると二人とも短い時間でもしっかりと、親や子どもたちとコミュニケーションをとっており、コミュニケーションをもつことで親や子どもたちの印象が残り、次回に思い出すきっかけとなるのである。

vi 子ども、親から学び、共に育つ姿勢
“みずべ”では0歳から3歳の年齢別講座の中に先輩の母親をゲストとして呼び、体験談や思いを語ってもらう取り組みをしている。そこでは生々しい生活者の姿が浮かび上がり、当事者ならではの説得力がある。手当たり次第にまわりの子をつきとばしてしまうといったことで悩んでいる親は今とてもよく見かけられますが、年齢別講座の中でもそうした悩みはよく出され、「加害者」「被害者」といった二極の構図を生みだしたり、親がしつけをポーズとしてやらなくてはいけない大人同士の関係や、将来いじめられっ子、いじめっ子に・・・といった未来への不安が折り重なり状況を悪化させている。

「なじみのセンターでもまわりに人が近寄りなくなり、だんだんと足が遠のいてしまった。公園にも行きづらく、朝早く起きて人がいない時間帯をねらって出かけていた。」この親は久しぶりにきた、センターでまずボランティアに「久しぶりだね、待っていたよ」と言われたことがきっかけで、胸のうちを打ち明けるところから展開があった。「みんなが敵に見えていたときに、自分たち親子のことを待っていてくれる人がいた。その言葉でどれだけ救われたか。」しばらく話をする中で、「Aちゃんも優しいところあるよ」「この前はこんなことしていたよ」といった事を言われ、「自分の子どもを否定的に見て、どんどん自分で悪循環させてしまっていたことに気がついた。」と振り返っていた。その後参加者全員で話し合いをしたが、聞いている側は共感をおぼえたり、まったく想像しなかった世界がそこにあると感じたり、様々な話の広がりがありました。この時に我々スタッフの何気ない一言や振る舞いがどれだけ、親たちに影響を与えるのか、改めて深い学びとなった。保育の世界ではよく「子どものことは子どもに学べ」と言われるが、私たちが親たちのことについて考えるとき、目の前にいる親たちに多くの事を教

えられることがあるはずである。

②冷静な判断

私たちはいつも暖かく人を迎え入れ、つながりをもちながら親子に寄り添っていきたいと思っているのだが、そこでは同時に冷静な視点も必要になってくる。冷静であるということは冷たいという事とは違い、自分たちの役割を見失わずにかかわることができるという事である。

i 背景と状況の理解

まずある人を理解するためには表面的なことだけでなく、背景や状況理解が大切である。あるときスタッフミーティングで、少し気になる親子の話になった。子どもはとても活発でいつもセンター中を走りまわって遊んでいる。他の子とトラブルになることもしばしばで、スタッフやボランティアが対応に追われることがよくあった。一方母親は喫茶のコーナーに座り込み、コーヒーを飲んだり、新聞を広げたり、あまり子どもをみようとはしていなかった。もちろん、コーヒーも新聞もこちらで用意し、お母さんたちにもゆっくりしてもらおうというねらいで置いているものなので、それはそれでかまわないのだが、あまりにもほったらかしという印象もあり、どう対応していくかという話になった。そのときセンター長のYは話し合いの中で、その母親と話をしたことをみなに伝えた。スタッフがはしゃぎまわる子どもの対応に追われていたときYは母親に「最近けっこう大変？」と声をかけており、母親は疲れた声で、ぽつりぽつりと話し始めた。「毎日毎日追いかけまわるだけでもうへトヘト、ここに来た時位、追いかけないでいたい。」「自分が楽をしたいという気持ちもあるが、それより自分でなくて誰か違う人が対応したほうが子ども為だと思う」と言い、さらに聴いていると、「実は、子どもが動き回る音がうるさいと階下から苦情がきている。だから家に帰りたくない」とのことだった。主任のHが「事務

室からはコーヒーを飲んでいる母親が見えるけれども、事務室の中からみた姿でなくひろばの中に入ってもっともっと親たち、子どもたちと向き合わないといけない」という意見で締めくくった。

スタッフ一同、その親子への見方が変わったことはいうまでもなく、すべての人にその人なりの事情や背景があり、表面的なことだけで判断したり、安易な類型化やレッテル貼りを慎まなくてはいけないということを再確認した。

ii 子どもの発達理解

育児不安の中では発達的な理解不足が原因の場合が多く見られる。首のすわりや人見知りといったことも理解がなければ、「何で?」といったことになる。「何でも口に入れてしまって汚い」、「お箸で上手に食べられない」など親としてはひとつひとつ疑問に思い、どうしても他の子と比較したり、できる、できないといったことにこだわってしまうことがある。そこで必要なのは発達の道筋を理解し、一人一人の育ちを丁寧にみながら、対応していくことである。ゆっくり進む子もいれば、早く進んだり止まったりを繰り返す子と、子どもの育ちは様々であり、保育者など多くの子どもと触れ合う者は、子どもの多様性を実感できるが、親にとっては、我が子しか抱いたこともないし、関わったこともないという人も多いはずである。もうひとつそこでは見通しがもてるということが大切になってくる。生活全般をふくめ、今どのような段階（状況にいるのか）次のステップは何か、その為に必要なことは何か、「大丈夫だよ」と言うのであれば、なぜ大丈夫なのか、現状をきちんと把握し、丁寧に説明をしていく必要がある。

iii 援助する心と技術

今われわれが積極的に取り組んでいることのひとつに、親同士のグループワークがある。以前より子育てに関する講座などもよく設けてきたが、もう一歩手応

えがほしいと思ったときに出あったのが、カナダの子育てテキスト「ノーバディズ・パーフェクト」であった。

「ノーバディズ・パーフェクト」ではなにより親たちの力を信じ、当事者同士の話しあいを中心にしながら進めていくプログラムであり、話しを聴くだけの講座では受身的になってしまいがちだが、自分たちが話しあう中で新たな道を探っていくというスタイルは”みずべ”にとってもマッチした。そこではスタッフは話しあいを進める為にファシリテーターとして関わるが、私たちにとってもファシリテーターとは？、グループワークの手法は何か？といった手探り状態で、実際に取り組みながらの勉強となった。ただし何でも新しい技法を取り入れればよいということではなく、そのプログラムや技法がもつ理念をよく理解し、自分たちの活動とどう結びつくのか、また実施するためにしっかりと理解や研修が必要なことなどを実施者がきちんと理解しておく必要がある。相談を受ける際には相談援助技術という面でケースマネジメント・カウンセリング等学ばなければならないことも多くあるが、いつもそこには、相談にくる人たちに対しての誠実気持ちが必要なのである。

iv 間を持つ

”みずべ”にくる親たちがよく「親身になってくれた」と言うことがあり、とてもうれしく思うのだが、そこでは一歩間違えると“なれあい”という深みに入り込んでしまい、状況が見えなくなってしまう事もある。相談などでは特に一つの課題が解決すればまた次といったかたちで、次々と状況変化と共にニーズも変化してくるということがある。そこでは一つの見通しをもちながら常に一歩引いたところで現状をしっかりと認識することも必要である。また今はちょっとした仲良し関係になることは比較的どの人も得意であるが裏返しに、とにかく表面的には平和に過ごしているが、本当に気を